

令和4年度 「第4回FD研修会：ロイロノートの使いかた」を聴いて

理科教育講座（生物）・中村 依子

1. 概要

近年、1人1台端末と、高速大容量の通信ネットワークを一体的に整備することで、多様な子供たちの資質・能力を育成し、教師・児童生徒の力を引き出すとする文部科学省のGIGAスクール構想の元、ICTを活用する学習が推進されてきた。「ロイロノート・スクール」は、授業支援クラウドの1つである。昨年、国立教育政策研究所が全国の児童生徒約214万人を対象に実施した「令和4年度 全国学力・学習状況調査」の結果、協働学習におけるICT活用率の高い政令指定都市で、授業支援クラウド「ロイロノート・スクール」が導入されていることが発表された。愛媛県では松山市を含め12の自治体の教育委員会で導入されており、愛媛大学教育学部附属学校では積極的に活用している。今回、オンデマンドで視聴したFDシンポジウムでは、ロイロノートスクールの概要の説明と、ロイロノートの使い方（クラスの作成方法、ノートの作成方法、写真・動画を含めたカードの作成及び送信方法等）について実習があった。

2. 総括

今の4回生が1回生の頃は、コロナが流行する前で、私は全くと言っていいほど授業の中でmoodleやロイロノートを使用していなかった。授業の中で受講生に、“課題の提出はmoodleじゃないんですか？”“発表の資料配布にロイロノートは使えないんですか？”と聞かれ、“ごめんなさい、近いうちにね、”と返答していた。しかし、その半年後に、パンデミックと言われる世界的なコロナの大流行となった。Moodleやzoomを利用したオンラインでの授業や実習、会議を余儀なくされた。しかし、これは私にとってICTを学ぶ、非常に良い機会となった。オンライン授業では、受講生が自分の発表に取り込んだARも体験することができた。県外の会社との会議では、zoom以外にGoogle MeetやWebexなどを、学会ではアバターを使用してオンラインで参加

したこともあった。

附属中学校では、授業の中でICTが盛んに活用されている。資料の配布やワークシートの作成、実験結果の共有など、ロイロノートが当たり前のツールのように活用されている。コロナ禍で、附属中学校とは共同研究として、教室内だけでなく、附属小学校や県外の研究者と動画やオンラインでつなぎ、異校種との協働学習を促すICTを導入した授業実践を行った。この時、授業にICTを導入することで教育現場にも無限の可能性が広がると強く実感した。

附属学校で教育実習を体験した愛媛大教育学部の大学生も、教員になるにあたりICTスキルを磨くとして、大学の講義や実習でロイロノートを活用したいと意欲的に導入しようとするようになった。授業で受講生が積極的にロイロノートを活用するようになると、必然的に私もロイロノートを使用するようになった。しかし、ロイロノートを生徒役のように受動的に使うばかりで、こちらから資料を作成して配布するなど能動的に使用することがほとんどないことに危機感を感じ始めていた。

今回のFD研修会は、私のような初心者にとってはとても良い勉強になった。特に、クラスの作成やクラスに資料を見せる方法などは今の自分に必要なスキルであった。実習には他にも多くの先生方が参加されていたので少し安心した。最近、LEGえひめのイベントにも参加し、使い方の講習を受けるとともに、他の教育現場でのロイロノートの使い方を学んだ。今後もこのような研修を受けたいが、携帯電話などのように、まず自分で何度も使うことが巧みに扱う一番の解決策なのだろう。

「教育現場」とは大学も含むはずである。今後も授業の中で受講生がICTを使用しやすいような環境を整えるとともに、私も繰り返しロイロノートを使用し、時代についていけるよう、みつともないかもしれないが、食らいついていきたい。